

『風 (08/06)』

風が吹いている
昔からの培われた
温もりの風が
森も川も平野を
街を人の心の中を
昔から培われた
風が吹いていく

風は過去から来て
未来へと吹いていく
あらゆる物が
過去をあてられ
未来へ想わされ
風は過去から来て
未来へと吹いていく

風が吹いている
生きある物の涙を上を
過去から未来へと
培いながら
ある時は怒りながら
ある時は微笑みながら

風が通り過ぎていく

『思い (08/08)』

子供のころから
大人の今になっても
一つ二つと
現れては消えてゆく
思いの数々

海の風へ向かって
幼い日々が黄金に光り
潮風の中で
帰らぬ思いを捨てて行く

大人になるために
生きていくため
子供のころの出来事を
心へと捨てて行く

母さんにも父さんにも
有った人生を……

一つ二つと
大人になった今になって
顔の皺が数えられる

『蝶々 (08/13)』

白い花と同じ色の
白い蝶々が飛んでいる
黄色い花と同じ色の
黄色い蝶々が飛んでいる
ヒラヒラヒラと
パタパタパタと
白色の蝶々は
黄色の花の上を
ひらひらひらと
ぱたぱたぱたと
黄色の蝶々は
白色の花の上を
青く澄み透った空の中を
ヒラヒラヒラと
パタパタパタと
楽しそうに花から花へと
飛んでおります
微かな風になびいている
花から花へと
忙しそうにせわしげに

白色の蝶々と
黄色の蝶々が
飛んでおります
飛んでおります

『広場
(08/13)』

朝オレンジに燃えて
昇る太陽は沈み
真っ赤に染まった
月が姿を見せている
宴の終わった広場を
なま暖かい風が吹いて
外灯が照らしている

周りの山から漏れてくる
鳥の羽音や蝉の泣き声
打ち水された広場の痕
大きなテーブル
かたづけられた椅子の山
最後の彼女が帰って
物音一つしなくなつた広場

今まで繰り広げられていた
ひそひそ話や笑い声は
夜風がきれいに吹き清め
過去から未来へとさつて行く
静かさの戻った広場を
外灯は照らしながら
暗闇の中で佇んでいる

『祈り
(08/18)』

霊園の中は
様々な思い出が
溶けて風へと
吹き消えて行く

生きていた時の
苦しきも
楽しきも
嬉しきも
淋しきも
皆死んでいった

大地の底には
引きずってはいけない
生き物の思い出が
眠っている

『線香
(08/18)』

線香の煙が
風に吹かれて
過去へと消えて行く
死に行った者の
戻らぬ日々へと
時空を後にする

線香の香りが
祈りの中で
風と共に立ちこめる
死に行った者の
沈黙の時空が
また遠くなる

『焼印 (08/20)』

夏の日の思いで
大きな樫の木の下で
休んだこと
川の流れに飛び込んで
流されたこと
蝉時雨のなか家族に
引っぱられて
お墓参りに行ったこと
何処にも行かないと
親へくっついてかかったこと
黒くアスファルトが
呼び水する炎天下を歩くと
焼きついた刻印が
臉に照り返って
妻の音がまるで母親の声と
同じく聞こえてくる
私の子供の時の声は
きつとこの子と
同じだったのだろう

『夕立 (08/20)』

ばらばらばらと
屋根を打つ

ざあーざあーざあー
降ってくる
夏の雨は激しいよ
みるみる水が
道隠す
通せんぼ通せんぼ
この道通って
みらしゃんせ
雷様がぴかっと光って
ドンガタンピシャー
怖いよ怖いよ
おへそ隠して
急いで家の中
悪戯小僧へ
入道雲の悪戯さ

『真夜中 (08/20)』

何が悲しくて
真夜中に涙を零(こぼ)す
生きていることの
淋しさに
泣いているのか

泉のように湧いてくる
清き心の悲しさよ
陽の当たることなく
銀色に光って消えて行く
哀れさ泪か

虫すらも眠っている
というのに
私の心は眠れずに
真夜中に泣いている
生きに泣いている

『空 (08/30)』

高い高い空の一点に
鳶が二羽大きな輪を描いて
上昇している
羽ばたき一つせず
早朝の空の中を
グングンと舞い上がっていく
眼下の嶺々が小さく小さくなるまで
二羽の鳶は上昇をやめない

豆粒のような姿になっても
彼らは輪を描くことをやめない
その鋭い眼と爪で天空の神へ
生きある物の
伝言をつたえるつもりなのか
太陽がようやく地平線に
燃える姿を見せ出した空を下に
二羽の鳶は視界から消えるように
舞い上がる行為をやめない

姿を現した太陽は
ギラギラと燃える火球が熱を
地上へと放射している
神の意志の伝言のように
人の住むビルの樹海を
森や河のある大地を

End all 1995/06

『九月の陽 (09/04)』

遠くで音がしている
踏切の遮断機の音
車の音
蝉の鳴き声
かっこうの声
電車の音
犬の吠える声
飛行機の爆音
一寸たりとも止まらない
音をどうやって
絵画へ描いていくのか
秋の陽が射す風景を
生きている幸せを
感謝の心を
どうやって描くのか
地球が生まれた時から
一日一日の絵画が
描かれ続けているのです
何処に行けば
その絵画を見れるのか
さまざまな泪と
様々な幸せを

『満月 (09/08)』

満月は空にあり
虫の音が原野に満ちる
吹き渡る風に
薄芒は揺れ樹木の葉が騒ぐ
ついこの間までの
猛暑はなく
季節は静寂を迎え
微かな音が風が通りゆく
幾年を繰り返すか
幾季節を過ぎてきたか
虫の音は変わることなく
月は満ち欠き
変わり行くは我が心也か
歳老いたるは我が身のみか
月に我が影の長きを思い
虫の音に我が命を想う

『痛み (09/10)』

心の痛みに優しく
差し込んでくる月の明かり
夜の空の中で一途に
照らし続ける月
喜びも悲しみもそしらぬように

ただ痛みだけを
柔らかく照らしている
生き物の痛みを
無言で見つめている

幾かの想いを
照らし続けたことか
思い通りにならない人の世の
痛みの耐えへ
照らし続けたことか
夢を見ることが出来ずに
震えつづける痛みへ
沈黙の明かりを照らし
耐える路を明るくしている

『Stefanie Maria Graf (09/12)』

とうとう会えた Monica Seles!
あなたが来るまで
負けるわけにはいかなかった
研ぎ澄まされた Graf の緊張が
若き覇者 Seles を襲う

Grat が崩れ出したのだ
Sels は……
瞬時に……そう思った
Grat のボールじゃない！
焦るな Sels は言い聞かせた

自分のすべてを出そう
Grat は無心に自分と相対し
返ってくるボールのみを
淡々と打ち返した始めた
ここが何処かも空白になっていた

自分が何かも消えていた
周りの観客も見えなかった
ボールだけが見え
無心に打っては
次にそなへて構えていた

『老い (09/14)』

悲しみよホーイのホーイ
痛む心よホーイのホーイ

狂う心よホーイのホーイ
星空よホーイのホーイ
月の明かりよホーイのホーイ
定めなき苦しきよ
ホーイのホーイのホーイ
二十の時の涙よ
ホーイのホーイ
五十の時の涙よ
ホーイのホーイ
六十の時の涙よ
ホーイのホーイ
尽きせぬ苦しきよホーイ
消えない悲しみよホーイ
痛む身よホーイのホーイ
月に照らされてホーイのホーイ
定めなき苦しきよ
ホーイのホーイのホーイ

『男と女 (09/15)』

恋の流れの行き先は
女の泪の止むる時
刃物の悲しい血の匂い
一度の生きの悲しさよ

戻らぬ旅路の門出ゆえ
衣裳化粧の儂さよ
生きてかなわぬ幸せを
月の明かりが照らしてる

祭りの夜の路地裏通り
風が吹いて去って行く
吠えたい生きの人の世を
ぐいっと心に沈ませて

旅路の女の幸せを
一途に祈る悲しさよ
男と女は哀れなり
女と男は哀れなり

『蟬 (09/20)』

蟬の鳴き声が
昼日中響いきました
秋の涼しい風を通して
耳に入ってきました

みんなみんなと
食事をしている中を
みんなみんなと
みんなみんなと
それから止んでしまった

十五夜もすんで
彼岸の花を持った
老婆が一人
路を歩いていきます

『手紙 (09/20)』

しばし夢を見させて
もらいました
美しきあなたの心を
胸に抱いて
一夜の眠りにつきましました

刹那の思いでも
私には嬉しいのです
夢すらもない生きますので
幸福に浸って

一夜の眠りにつけます

美しき人の涙を
心に深くしまいこんで
私はこれからも生きるでしょう
悲しいときには
あなたをいつでも出せるのですから

『部屋 (09/23)』

ご飯を炊いて
おかずを盛りつけて
今宵も膳に向かう
黙々と食べ
話す相手もなく
しばらく我を思い
お茶を飲んで
後かたづけをする

いつしか
ガラス戸に映る自分が
私を睨んでいる
いつまでも瞬きせず

刻々と針の音だけが
部屋中に響き
ふと蛇口の水流に
本当の自分を見ている

『ゆめ (09/29)』

いったいどうしたのだろう
言葉は妖精のように消え
私はなすすべもない
人生の総てが離れていく
いったいどうしたのだろう
希望も差し込まない
深い深い海の底にいるようだ
あれほど沢山の人がいたのに
今は誰もいない
もう私は人々に夢を描かせる
魔力が消えたのだろうか
もう私には人々に夢を語らせる
魔力が消えたのでしょうか
メロデーもリズムも
私を見捨てていったのだ
詩も言葉も
私にさよならしたのだ
私にさよならを告げたのだ

でも人生は夢がなければ
生きていけない
希望を燃やしなげらね
でも人生は愛がなければ
生きていけない
本当の愛を私は知ったのだ
いつも人々に囲まれ
いつだって一人ではなかった
魔力が去って行った時
彼らは私を避け出した
私が一人で誕生日を迎えても
彼らは知りながら
横目で通りすぎていった
再び魔力が戻った時
私は大事にするだろう
本当の友人を本当の愛を
でももうそんな人生は来ないかも
もうそんな人生は来ないかもね

『夢 (09/29)』

過ぎ去りし日々
お私私の消えて行った日々
確かに有った日々
毎日毎日人は私を待ち
私は彼らに夢を見させた

人生の素晴らしさをね
片時も私は
一人になることはなかった
いつも誰かが私の側にいた
過ぎ去りし日々
私の消えて行った日々
確かに有った日々
私はこれが人生だと思った
これが自分の人生だと思った
朝起きると私は妖精になり
そして人々は私についてきた
あの黄金とバラの日々
心には悩みも苦しみもなく
すべてが私の物だった日々
過ぎ去りし日々
確かに有った日々
今は夢のような日々
夢のような日々

End all 1995/09